

人生二度目のサーカス

是澤 克秋（これさわ・かつあき）

僕は先月、友達とサーカスを観に行った。木下大サーカスというサーカスで、世界三大サーカスに認定されているそうだが僕はこのサーカスのことは知らなかった。何年か前に中国に単身赴任している父のもとに遊びに行った際に、雑技団のようなものを見せてもらったが、それはそれは大変な迫力であった。空中ブランコで上空をビュンビュン行き来している人や、何個回していたかわからないほど多くの球をジャグリングしていた人がいた。そんな雑技団の記憶がぼちぼち残っている中で木下大サーカスを観に行くのは少し気が引けたが、行ってみた。

兵庫での公演で開演時間より数分遅れて会場に入った。会場は特設ステージだったようで、外から見ると巨大なテントのような形をしていた。中は中央に舞台があり、その周りは360度客席であった。中に入った時は二人の女性のパフォーマーが柔軟な体を生かして踊っていた。その後約一時間、いろいろなパフォーマーが各々の演目をこなしていった。どの演目も大変見応えのあるものだった。

第一部が終わると15分の休憩があった。この休憩で、係員が舞台に柵を設置していた。なんのための柵だろうと思っていたら第二部が始まった。第二部はこのサーカスの目玉であろうホワイトタイガーの演目から始まった。柵はこの演目のためのものであった。大きなトラとライオンが計8頭でできて、一人の屈強な男がその8頭を思うがままに動かしていた。とても迫力があり、トラに指示を出していた男は勇敢に見えた。怒っているのか、突然ライオンが吠えるシーンがあってとてもひやひやした。

そして、奇跡は起きた！

この日一番気持ちが高まったのはこの後であった。ホワイトタイガーの演目が終わるとピエロが2人出てきて、僕と、僕と同じような年代、体型の男性をあと3人つれて舞台まで連れていったのだ。舞台にのぼると拍手で迎えられ、スポットライトを浴びた。スポットライトがかなり眩しく、客席はあまり見えなかった。舞台では男4人でピエロのまねをして踊り、ペコちゃんキャンデーをもらってもとの席にかえされた。舞台上ではピエロのまねをただけだったが、拍手で迎えられてスポットライトをあてられるとドキドキし、興奮した。シャイな性格で人前に出ることはあまり好きではないが、このときばかりは注目を浴びていることを楽しく、気持ちいいとさえ感じた。

パフォーマーの方々は涙ぐましい努力を重ねて、さらにその中でほんの一部の方のみがああステージ立てるのだと考えると、その後の彼らのパフォーマンスが一層華やかで、凄みを増したものに見えた。

木下大サーカスの公演はとても楽しかった。数年経ったらまた観に行ってみたいと思う。



五感で感じるぬくもり

田中 利枝（たなか・としえ）

夏の暑さはとっくにどこかへ消え、顔にかかる空気も冷たく、寒さで手も悴んでしまいそうである。11月にはコートはまだ早いと思うけれどそろそろしっかりしたアウターがほしくなる。ポケットに手をつっこみ、今シーズンおろしたてのマフラーで口元をすっぽりと覆い、街を歩いていると、ふと、目に入る光景が。そこではエプロンを着た従業員がにこにこ笑顔で接客をしている。店の外には新商品が描かれたイーゼルがずらり。楽しそうにおしゃべりをしている女性たち、スーツをきたサラリーマン、また学校帰りと思われる学生たちがカウンターやテーブルでそれぞれの時をすごしているのが窓越しにうかがえる。彼らは皆ロゴ入りのマグカップや紙カップを手にしてしている。そう、コーヒーショップである。カフェではドリップコーヒーやアイスコーヒーといった一番安い飲み物でも約300円。缶コーヒーはその半分以下の値段。金欠にも関わらず誘惑に負け、カフェに入ることにした。

店に入るとまず聞こえるのが店員の元気のいい挨拶。コーヒー豆を挽いている音はまるでBGMのように耳にすっと入ってきて、その音でどこか落ち着く気がする。そして次にぬくぬくとした暖かい空気を肌で感じ、コーヒーの香りが漂ってくる。角の席に荷物を置き、注文をしにレジへ。店員が気を利かせてくれてメニュー表を持ってきてくれる。私の中でいつも注文する時には大まかに選択肢が二つある。一つは少し小腹が空いているときにちょっとしたクッキーやお菓子と共にブラックコーヒー。もう一つは季節限定のあま〜いドリンク。どちらも結局は高カロリーなのだが、店に入ってしまった以上忘れて、コーヒーブレイクを楽しむことにしよう。そして今回はドリップコーヒーとチョコレートチャンククッキーにすることに。クッキーはオープンで温めてもらい、準備はバッチリ。席に着き、早速コーヒーを一口、の前に冷えた手でマグカップを包みあつたまる。店内用のマグカップで入れてくれたコーヒーからの湯気を見て、見た目からも温かさを感じる。紙のカップよりなんとなくマグカップの方が温かそうに見えるのは私だけだろうか？それは置いておいて、コーヒーの香ばしい香りを感じ、一口。猫舌な私はどれだけ注意しても一口目は必ず火傷しそうになる。念入りにふーと息を吹きかけもう一口。コクの深さを感じ、鼻に抜ける香りを楽しむ。どことなくフルーティーで爽やかな甘い後味。そしてそのあとに、ほのかに温かいクッキーをかじる。また苦いブラックコーヒーと甘いチョコレートが合う。甘さとはどうしてこんなにも疲れた体を癒してくれるのだろうか。だから甘いものはやめられない。そしてこの何とも言えない幸福感が寒い体に染み渡るようだ。気が付くとクッキーは残り一口、コーヒーも二、三口で終わってしまいそうな量。幸せなブレイクタイムもまもなく終了、である。最後のクッキーとコーヒーを口に入れて、店をあとにする。

外にでると再び風が冷たく、またポケットに手をつっこんで歩き出す。暖かいところから寒いところに出るときのなんともいえないあのひやっと感が寒さをより際立たせる。寒さは苦手なので、冬はあまり好きではない。しかし、その分冬はぬくもりを感じやすい季節である。人のぬくもり、手袋のぬくもり、温かい食べ物のぬくもり、など温かさを感じる手段はいくつもある。その中でも私はおなかからぼかぼかするような飲み物のぬくもりが好きである。そしてそのぬくもりを思い出すだけで幸せな気持ちになれる気がする。



当たり前

車 健太郎

試合が終わる笛の音をピッチの外で聞いたのは、高校三年生になってから初めてのことだった。同時に、それは自分の高校サッカーが終わったことを告げる笛でもあった。様々な習い事を半強制的に親から習わされてきた自分が小さな反抗心から自ら希望して始めたサッカーという小学校三年生から継続してきた唯一のものが、このような形で終わるとは思ってもいなかった。

高校サッカー福岡県大会二回戦。予選から継続して試合に出し続けてもらっていた自分が先発のメンバーから外れることは十分予測できていたことだった。予選で1得点しか挙げられず、本戦は無得点。不調は誰の目から見ても明らかなことだった。しかし、心のどこかで、今日も試合には出場することができると思いつ込んでいた。しかし、出ることはできなかった。

高校最後の試合を、ピッチの外からベンチに座って眺めて、応援をしている登録されなかったチームメイト、保護者の方々、普段見えないところまで目いっぱい見渡すことができた。応援には一回も来たことがなかった父の姿も見えた。「朝は何も言ってなかったのに」とか、「去年まではベンチに座ることすらできず、ひたすら応援席から声援を送っていたな」などとのんきなことを考えていたらチームは先制。1-0で前半を折り返し、後半に向かうことになった。

大会はトーナメント形式なので勝てば引退までの時期が延び、負ければ即引退。勝つことができると次の試合までは一週間あるため、先制したときには誰しもが、「まだサッカーができる」と思ったのだろう。その気のゆるみからかどうかは分からないが、後半開始直後、相手チームに点を返され、1-1。直後に加点され1-2。そのまま、試合終了の笛を聞くことになった。試合の間、一度もウォーミングアップの声が監督からかからず、ベンチを温め続け、90分を過ごした。試合に出ているメンバーを励ます気分になれず、黙って90分間を過ごした。

終わったという実感の湧かないまま、ピッチでうなだれているチームメイトを横目に一足先にロッカールームへ切り上げ、一足先に帰り支度をし、他のメンバーが引き上げてくるのを待った。自分同様試合に出ることのできなかったメンバー、応援を頑張っていたメンバー達が続々と帰ってくる。

驚いたのは、誰しもが自分を励ましてくれたことだった。最後の試合に出られなかったのは皆同じはずなのに、誰しもが自分を励ましてくれる。悔しい、という気持ちも、湧いていない自分にどうして声をかけてくれるのだろう、と考えていた時に初めて、試合に出ることが当たり前になっていた自分に気づいた。応援してくれていたチームメイト、わざわざ応援に駆け付けた保護者の方々、みんなの思いに気づくことができていなかった。涙が止まらなかった。試合に出ることに満足をし、自分のことだけを考え、チームが勝とうと負けようと、試合に出ないから関係ないと思いつ込んでいた自分を恥じた。皆の優しさに触れて、はじめてチームスポーツで負けることの喜びを知った。

後にも先にも、試合に負けてよかったという経験をしたのはあれっきりで。



雪に感じること

橋本 共平

私は体育会で日々バドミントンに打ち込んでいる。学校の長期休業中は週当たりの練習日が増え、部活漬けといったような毎日で二か月ほどの休みがあつという間に過ぎていく。そんな2月中旬のある日のことである。この日は朝早くからの練習の予定であり、私は家を出る一時間前には起きて朝の支度をしたいのだが、この日はあまり余裕がない時間まで寝ていた。目が覚めてカーテンも開けずに少し急ぎながら、顔を洗ったり着替えたりしていたのだが、少し外が静かなような感じがした。

携帯を見るとLINEの通知が来ていた。キャプテンから「電車が遅れて間に合わない人は連絡ください」云々、なにやら部活は練習開始予定に始まらないそうで、それは天気の良い日というものだから、私は外の様子を見ようとカーテンを開けた。雪だった。そこらを覆い尽くし、その瞬間も降り続ける雪であった。驚き、少し困惑し、それでいて陽気なそんな気分になった。

いつもなら原付で学校に向かうが仕方なく歩いた。練習が始まらないので暇を持って余したチームメイトが体育館の外で雪合戦をしている光景を、大学在学中に二度と見るのだろうか。練習が終わった後には、時間と体力が残っている先輩や同期とかまくらづくりをし、この大雪の日を十分に満喫した。

私の故郷は雪が降ることなんてちっとも珍しくもない北海道である。道民は本州で雪が降りニュースで「大雪」だとか言っているのをみて失笑する。私もそういう道民の一人だが、大阪に出てきて生活するにつれ、暑い夏や雪は降らないが乾燥する冬の生活に慣れた。年に一度帰省するのが冬なのでその時には雪国に戻ってきたと実感するもので、大阪で雪が降ることは珍しくましてや積もることなどはなかなかないだろう。

その日、雪が降り鎌倉を作ることができるほど積雪したことで、いつもとは違う気分が上がる一日であったことは間違いないが、私にとっては加えて北海道を思い出させてくれる素晴らしい日であった。懐かしさは、人間の五感のどこからでも感じられる。そして感じ取った感覚の数が多いほどその懐かしいもの、場所、時間に浸れる錯覚の度合いが大きいものではないだろうか。その日はただただ懐かしむだけであったが、いま一度その時の心地よさを振り返ってみれば、まず、朝カーテンを開けたときに目に入ってきた白さ、いつも過ごすキャンパスが雪に覆われている風景。外に出た時に感じた静かさ。つまり、雪ともなればバイクは走らないし、外出しない人もいるだろうし、なんとなく辺りがシーンとするのが感じられた。同時に雪の匂いは「いつもあるものがないこと」を感じさせる。これが雪の匂いとはっきりするものを私は知らないが、雪がなんらかのはたらきをして普段ならあるはずの匂いを消したのだろう。匂いがないことから雪のある生活や故郷を思い出すというのは大袈裟だが、たしかに感じていたはずだ。そして、雨とは違う雪の自分の体にゆっくりと降りてくる感触。さらには雪の上を歩くときの踏みしめ心地（こういう表現が適しているかわからないが…）をもはっきりと感じた。雪のある生活をする地方の住民なら共感してもらえと思うが、日ごとに、また冬の始まりと終わりで降った雪の質によって異なる踏み心地がある。こんなふうに、（意識していたわけではないが）地元で生活していた時に似たものを覚えた。地元を離れ一人で生活していると、寂しく感じ地元に戻りたくなることがあるがこの日の天気はすこし懐かしさでそんな気持ちを少し満たしてくれた。

もちろん、雪が降ったら大阪に住み馴れた私にも困ることがあるが、あの日の様な楽しいことができたり懐かしさでいい気分になれたりするのなら、またそんな日が来てほしいと思う。

人生を楽しむということ

中西 建人

楽しかった思い出は色々と浮かぶけれど、その中でも自分の成長できるきっかけとなり、新たな自分を発見できた「楽しさ」という面で浮かんだのは2年前、ニュージーランドでの1ヶ月間のホームステイの経験である。

1回生の2月、このままラグビー的にも人間的にも成長しないままで2回生になり、後輩を迎えるのが嫌で、楽しみと不安が入り混じった気持ちで、語学&ラグビー留学という形で日本を出発して飛行機で約16時間。ニュージーランドの首都ウェリントンに到着した。これが僕にとって初めての海外であった。周りのものが全て英語表記で（当たり前ではあるが）、ミーハーな僕はそんなことで「ああ海外に来たんだなあ」なんてことを実感した。ウェリントンの空港で必要最低限の換金を済ませ、お世話になるホームステイ先のホストマザーとの待ち合わせ場所へ向かった。第2の母の名前はアンナ、年齢は56。56歳とは思えないほど見た目は若く、見つけるのに時間がかかってしまった。アンナと合流した僕は早速ステイ先を訪問することになった。とても広い家で、その家でのルールやウェリントンの中心街の簡単な紹介、そして中心街まではバス移動であることなどを教えてもらった。アンナが僕に向けて言った「この家で私は貴方のことを実の息子のように愛するけれど、自分のことは自分でやりなさい。私は貴方のメイドではないから」という言葉（英語だった）は今でもよく覚えている。初めての海外で、助けてくれる人に甘えてしまいそうになるのを気付かせてくれる、本当の母のような厳しさの中の優しさがそこにはあった。

それからは僕は自分でまずは考えて、上手くいかない時にアドバイスをもらうことを習慣づけた。知らない土地で、慣れない言語で何とかやっつけていこうとすることは、とても難しいことではあるが、楽しくて仕方が無かった。特に楽しかったのは、ラグビーにおいて自分の考えを表現すること。ラグビー王国と呼ばれるニュージーランドで、自分の思いを表現できるチャンスはラグビーをしていれば誰しも欲しがらるものである。事実僕はそのチャンスを生かせるように精一杯英語を勉強した。大好きなことのためには、少々苦手な英会話も楽しめるものであった。

ラグビーのことばかり書いてしまったが、もちろんそれだけではない。観光もショッピングも存分に楽しんだ。サーフィンも生まれて初めて挑戦した。現地の友達も、アジアの他の国から来た友達も、もちろん向こうで出会った日本人の友達もたくさん出来た。今でもやり取りをしたり、遊んだりできるかけがえのない存在である。

留学するということは、単に学びに行くというだけではないのと言うまでもない。苦勞して得たものは自分の実となるし、そういうものこそ、本当に楽しむことが出来ると僕は留学を通じて感じた。



夢の国へ踏み込んで

遊記
—Yukiの英国漫 Yuki—

谷脇 裕紀

16年来の憧れを求めて

幼いころの経験は時に鮮明に記憶に残ることがある。そんな記憶がきっかけとなって生涯の職業を選んだり、夢を追いかけていたりする人も少なくはないだろう。僕もそんな人間の一人である。わずか22年ながら、これまでの僕の人生に大きな影響を与えてきたのは生まれて初めての海外旅行、イギリスへの旅行である。僕が5歳だった時、僕の父親は英語教師の派遣研修でイギリスの大学院に留学していた。そこで僕は母親と一緒に父親に会いにイギリスを訪れたのだ。正直な所、その時の記憶は忘れてしまっていることの方が多いと思う。しかし、そんなあいまいな記憶の中でも今も映像として鮮明に思い出せることもあり、あの時、英国の文化に非常に興味を持ったことは強く印象に残っている。それ以後、イギリスという国が何となく気になるようになり、いつしか、イギリスにもう一度行くんだ、いつかブリテン島中を旅するんだという思いを抱くようになった。そして幸運なことに3年生の時に大学を休学し、北イングランドの **Newcastle University** に9ヶ月間留学することができた。言い換えるならば、16年越しの夢を実現することができたのだ。もちろん、大学の授業についていくのは本当に大変で、平日はほぼ毎日夜遅くまで勉強していた。しかし、すべてを勉強だけに費やすのはあまりにもったいない！そう考えた僕はほぼ毎週末、有名な観光地から小さな町までイギリス各地に旅に出た。そのほとんどが一人旅だ。今まで一人旅などしたことがなかった自分にとって知らない国で拙い英語を使いながら旅をするのはまさに大冒険だった。その冒険はかけがえのない財産であり、非常に幸せな思い出となった。今回はそんな大冒険の中から **England, Wales, Scotland** の3つの地域からそれぞれひとつずつ町をピックアップし、旅行記を書いてみようと思う。敢えてガイドブックなどにはあまり載っていない魅力のある街を紹介することにする。

ペンザンス

Penzance (Cornwall, England) ※写真1～3

イングランド最西端に位置するこの町は鉄道の西の終着駅。ケルト人が住んでいた土地だったので駅の看板にケルト語が書かれているほどケルト文化が残っている土地でもある。**British English** でよく言う 'lovely' という形容詞がぴったりな可愛らしいリゾート地だった。この町の一番の目玉はイギリス版モン・サンミッシェルと呼ばれる **St Michael's Mount** だろう。フランスの本家同様、満潮時には沖に浮かんでいるが、干潮時には修道院のある島までの道が海中から姿を現し、陸とつながる不思議な所だった。そんな神秘的さが崇められてか、町の名前の **Penzance** はケルト語で「聖なる岬」を意味する。この **St Michael's Mount** はアーサー王伝説の楽園、アヴァロンのモデルではないかと言われていたり、巨人伝説が残っていたりするがそれもこの島のミステリアスさを感じれば十分納得できるだろう。海上に現れた一本道を渡るとまるで海の上を歩いているような不思議な気分を味わえた。その日は快晴で、春の日差しを浴びながら島の一番高いところにある修道院からケルト海の絶景を楽しめた。また修道院の内部や南国の植物を集めた庭園も見応えがある。

この辺りの地域には **Cornish Pasty** という名物がある。これはパイ生地です塩肉じゃがを包んだよう

な半円形のパイ料理である。かなりずっしりと具が入っていて味も量も（英国料理には珍しく!?) 非常に満足だった。

カナーヴォン Caernarfon (Gwynedd, Wales) ※写真4～6

北ウェールズはウェールズ文化が根強く残っている地域だと言われており、よくウェールズ語を耳にした。この言葉を初めて聞いた時は同じイギリス国内の地域なのにまるで外国に来てしまったのかのように感じた。ウェールズ人たちは英語とは全く違う言葉を使う事で彼らのアイデンティティを大切にしているんだなと改めて感じた。（外国人に対しては分かりやすい英語で話してくれるのでご安心を!）

そんな北ウェールズの魅力は13世紀にエドワード1世がウェールズ侵攻のために築いた古城群だろう。これらはどれも円筒をいくつも並べたようないかにもおとぎ話に出てきそうな中世風の堅固な古城で、非常に雰囲気がある。北ウェールズ西部のこの町にも **Caernarfon Castle** という城があるのだが、保存状態がよく、眺めもとても素晴らしかった。西側には穏やかな海の眺め、東側では雄大なカンブリア山脈の景色が楽しめた。その青と緑のコントラストが美しかった。この城は河口のすぐそばに位置しており、河口と海とを天然の堀として使っている。そのため、城が水の中に浮かんでいるように見えるのが面白かった。**Caernarfon** という町は町自体が世界遺産に登録されている。町自体はあまり大きくないので半日でウェールズ国旗が所狭しとはためく町並みを隅々歩いて回る事ができた。また、ウェールズ北部はスタジオジブリの『ラピュタと天空の城』のモデルとなった地域でもある。各地の重厚な古城と高くそびえる山々からはまさにラピュタのイメージを思い浮かべることができたが、個人的にはこの町の城が最もそのイメージに近い気がした。ラピュタファンもそうでない人も一見の価値のある町だろう。

スターリング Stirling (Stirling, Scotland) ※写真7, 8

町の名前の由来が「努力の地」であるこの町ではイングランドに何とか抵抗し、この町を守り切ったスコットランドの人々の努力の歴史を感じることができた。重厚な石造りの建物が立ち並ぶ石畳の坂を上っていくと **Stirling Castle** が見えてくる。スコットランドの英雄、**Robert the Bruce** や **William Wallace** とも関係のある町であり、彼らの像や記念碑は城内だけでなく町中に点在していた。1995年公開の映画、『ブレイブハート』のファンにとっては興奮間違いなしの町だろう。（僕もこの映画に出てくるハイランドの雄大な景色、バグパイプの音色、**Mel Gibson** 演じる **William Wallace** の勇猛さに魅了された一人だったので絶対訪れたい町だった。）この城の敷地は広く、展示物も充実していた。特に城内にたくさんかかっているスコットランドのシンボルであるユニコーンをテーマにしたタペストリーが美しい。当時の衣装を着て時代劇風な話し方をするガイドのおじさんの話を聞きながら城内を歩いているとまるで中世スコットランドにタイムスリップしたかのように感じた。

その時はコンサート中で中へ入ることはできなかったのだが、城へ続く坂の中腹には **Church of the Holy Rude** と呼ばれる荘厳な教会があり、この教会の素晴らしいステンドグラスを見るためにこの町に来る観光客もいるそうだ。

最後に…

日本ではイギリスと呼ばれる国、**The United Kingdom** はそれぞれの地域ごとにそれぞれの歴史、文化を感じることができる興味深い国だ。今回紹介した町以外にもまだまだ魅力のある町はたくさんある。僕は留学中の9ヶ月間でその多くの町を訪れ、魅力を十二分に味わった。きっと日本の英語学、英文学を専攻する学生でここまで英国文化に魅せられ、ひたすら実地調査をした学生はほとんどいないだろう。(どれほど僕が英国オタクであるか分かってもらえたかもしれない。)しかし、それが16年来抱いていた僕の夢だったのだ。振り返ってみると、難しい授業に苦しんだ日々も、他の学生たちとのパーティーも、言いたいことをうまく英語で伝えられないもどかしさも、世界史で学んだ歴史的な町を訪れた時の感動も…全部含めて留學生活の一瞬一瞬がきらきらしていたように感じる。長年の夢を果たした今、僕はとても幸せである。やはり、何かに憧れを抱き、それに向かって努力をすることって素晴らしいと思う。そしてそんな目標を達成した後にしか味わう事の出来ない達成感を感じる瞬間は何物にも代え難く楽しく幸せな瞬間なのかもしれない。

フォトギャラリー

写真1



干潮時の St Michael's Mount

写真2



潮が満ちると島は完全に海の中・・・

写真3



Cornish Pasty

写真4



ウェールズ語の標識や看板もあった

写真5



Caernarfon Castle

写真6



城の真ん中で記念に一枚！

写真7



Stirling Castle

写真8



当時の衣装を着たガイドが案内をしてくれる